西山町錦鯉養殖組合代表

山田　清美

YAMADA KIYOMI

1962年　柏崎市西山町出身
2021年　西山町錦鯉養殖組合組合長を務める

紅白や金、大正三色、昭和三色など、美しく色鮮やかな姿形から「日本の泳ぐ宝石」とも呼ばれる錦鯉。柏崎刈羽地域には、錦鯉を生産する「柏崎錦鯉養殖組合」と「西山町錦鯉養殖組合」の2つの組合があり、来年4月に「柏崎市錦鯉組合」として統合されることが決まっている。その代表を務めるのは現在、西山町錦鯉養殖組合の組合長として活躍する山田清美さんだ。

山田さんが錦鯉に初めて出合ったのは19歳の時。元々、魚釣りが大好きだったこともあり、勤務先の先輩から繁忙期の作業を手伝ってくれないかと声を掛けられたことがきっかけになった。錦鯉を引き上げたり池に離したりという力仕事が主だったが、次第に錦鯉の美しさと奥深さに魅了されたという。

先輩から「せっかく世話をしているのだから飼ってみないか」と黄金の鯉を10匹もらい、知り合いの土地を借りてスコップと一輪車を使って自力で土を掘り、池を作った。実際に飼育を始めてはみたものの最初の頃はどう扱っていいのかわからずうまくいかなかった。何年もそれが続いた後にようやくこれではだめだと気付き、重機を使ってさらに土を掘り水深を深くした。そこが自分のスタートになったと山田さんは当時を振り返る。

錦鯉は上から見た時の姿形や色調、模様の美しさが魅力。毎年県内各地で品評会が開催され、生産者はそこに向けて錦鯉の出品を計画していく。大きさは15cmから5cm刻みで85cm超まで。それぞれの大きさと模様の種類ごとに分類され、項目ごとに美しさが競われる。

1尾のメスが産む卵はおよそ10万個だが、そこから生まれる錦鯉が全て美しいわけではない。大きくなった時に美しくなる可能性がある鯉を稚魚のうちから選別を重ね、育てていくのが生産者の役割。飼育方法を考え、環境、えさ、水質等を管理し、常に健康状態を把握し注意を払う。最初の頃は育てた鯉が愛おしくて販売することができなかったと山田さんは苦笑する。錦鯉には個体ごとに一番美しい盛りの時期があるといい、「その見極めを先輩の師匠からずっと教えられてきた。40年経ってそれがようやく分かり始めてきた」と話す。

現在、自宅敷地内にある「いけす」には、6月に卵から産まれ、15cmほどに育った約3000匹の錦鯉がひしめいている。小さいながらも紅白や黒白、金、銀、青みを帯びたものなど、さまざまな色彩が見えて美しい。1年間いけすで育てられた錦鯉は春になると池へ離されるが、はたから見るより日々の世話は忙しく365日休みなく続けられている。

錦鯉の愛好家は国内だけでなくヨーロッパや東南アジアにも広がっている。最近では水槽で気軽に小さな錦鯉を飼育する人も増えているという。若い人たちに少しでも興味を持ってもらい、今後は後進の育成も考えていきたいと山田さんは前を向いた。

お問い合わせ　JA越後中越刈羽支店営農課
☎0257-45-2255